クンデラと君が代のあいだ チェコ共和国留学後記

須藤 輝彦

チェコから帰国して半年が経とうとしている。6ヶ月。忘れるには足らないが、思いだすには短い時間だ。

じつは僕にとってチェコへの留学は、かなり突発的なものだった。これはちょっと危うい発言なのだが、学部三年くらいまでは、チェコという国は僕の人生設計のなかにどんな場所も占めていなかった。カフカは好きで読んでいたが、なんせ十代前半のことで、チェコのことなんて知りもしなかった。しかし卒論を書く段になって、何について書こうか考えているうちに、ミラン・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』が頭に浮かび、離れなくなった。論文執筆の二、三年前に読んでいた作品だが、すごくおもしろかったことは憶えているものの、何がおもしろいのかは皆目わからない。この「わからなさ」にずるずる引きずられていくうちに、チェコという「ヨーロッパの臍」に辿りついた。

現地で僕が所属したのは、カレル大学 Univerzita Karlova v Praze という中央ヨーロッパで一番古い大学の、現時点では一番新しい人文学部 Faculta humanitních studií だ。チェコ語とチェコ文学を中心に、中央ヨーロッパの歴史や哲学の講義を受講した。そのなかでとくに印象に残っているのは、ヤクプ・チェシュカ教授によるミラン・クンデラについてのセミナーだ。チェシュカ教授はまだ四十代に入ったばかりの若手研究者で、「チェコにはほとんどいないクンデラ専門家」のうちのひとりである(本人言)。そのこともあってか、数少ない「クンデラ仲間」として、僕にはとても良くしてくれた(彼の勧めで僕たちはお互い「君呼ばわり tykat」で話した)。国立博物館にほど近いレストラン「デミーンカ Demínka」で、美味しいピルスナーを飲みながらクンデラについて語りあった夜は、とてもいい思い出だ。

さて、「クンデラ仲間」の名に恥じないように、僕もちょっとつっこんだ話をしておきたい。「フランスの作家」として認知されたいという本人の思いとは別に、ミラン・クンデラは間違いなく戦後チェコを代表する小説家である(高校の教科書にはクンデラの『冗談』が載っている)。しかし敢えて一般化すると、政治的・人格的などさまざまな理由から、彼はチェコ人にあまり好かれておらず、脊髄反射的な反感をもつ人も少なくない。亡命先フランスでの受容とは実に対照的である。ある程度予想はしていたが、クンデラ研究を目的としてやってきた僕がぶつかったのも、この壁だった。

ただチェコにおけるクンデラ受容には、大きな世代差があるようにみえる。例えばよくクンデラと比較される存在として、彼とともに戦後チェコ文学の片棒をかつぐボフミル・フラバルがいる。同時代のチェコ人にとって、ソ連による圧政下でも亡命せず母国に留まったフラバルが「英雄」だとすれば、わかり易い図式でいうと、クンデラはやはり「外国に逃げた」「裏切り者」となってしまう(亡命しても未だに尊敬されているミロシュ・フォアマンのような作家もいる。先に触れたように、クンデラが敬遠されるのは単に政治的な理由だけではない)。しかし共産主義時代を直接に知らない若者にとって、少なくとも「当事者」たちの世代と比べると、これらのことはあまり関係がない。

じっさい、純粋なテクスト受容の観点からいえば、僕と同年代かそれ以下くらいのチェコ人にとっては、フラバルの文体——一文がやたらと長く、改行も少なく、スラングのような独特の言いまわしも多

い「フラバル語」――には、なかなか受け容れがたいものがあるようだ。チェシュカ教授も言っていた。「とても残念だけど、今の学生はフラバルを読もうとしないんだよ。フラバル的な文体は、彼らにとってはもうむずかしすぎるんだ」。

小説における文体の簡潔化は、もちろんチェコだけで起きているのではなく、インターナショナルな、 世界規模の現象である。文学が世界化するにつれ、文体の国民性が漂白されがちになる。

このことにもかかわるが、プラハで生活してチェコ人と交流しているうちに強く感じたのは、彼らのナショナル・アイデンティティの脆弱さ、自分達の国家に対する思いの複雑さである。むろん独断と偏見といって差し支えないが、僕が関わったチェコ人で、チェコという国にたいして手放しで「誇り」のようなポジティブな感情を表明した人間は、ひとりもいない(チェコ人をふくめたヨーロッパの留学生とともに受講した政治学の授業でもそうだった)。じつは彼らは母国を誇りとしているが、表に出さないだけかもしれない。そもそもチェコ、とくに現在のプラハはスラヴ系を中心とした移民に溢れており、19世紀の民族復興運動で芽生えた「国民意識」も、すでに薄れているのかもしれない。いずれにせよ、人生のほとんどを日本で過ごした僕にとっては(イタリアにも1年いたが、ナショナル・アイデンティティの強固さという意味では、日本とさほど変わらない)、この点はやはり非常に興味深く感じられた。

最後にもう少しだけ視角を変えて、この文章を終わりにしたい。 関係者にとってはお馴染みすぎて恐縮だが、チェコ共和国の国歌は、次のように始まる。

Kde domov můj, kde domov můj? 我が故郷はどこに、我が故郷はどこに?

僕をチェコ文学の深い森に誘った強烈な「わからなさ」は、ひとつには、この国歌と「君が代」の間にあった。これが今回の留学から得た、ささやかながらも大切な発見である。

(筆者はチェコ政府文部省国費留学生として、2014年8月から2015年7月までの11ヶ月間、カレル大学人文学部に留学した。その後1ヶ月ほど同大付属の語学学校ÚJOPのサマー・スクールに通い、日本へ帰国した。)